

幕末明治の写真師列伝 第百十七回 宮下欽 その三十五

ギルベッド（あるいはギルベット）という名の外国人写真師については、翌4月7日のページに1枚の紙が挿入されて残っている。それによれば、

「過刻、玉宝堂金兵衛ヲ以申上候云々、定而（註：さだめて）御了解と奉存候ニ付、尚奉伺候、芝へいつ頃御出張相成候哉、且ギルベット希望仕候御写真帖博物館へ相廻候御物品ノ図并上州富岡糸製場ノ図等部、一兩日拝借相成候て、此奴へ御附与奉希度、前二条相窮度、貴報御口演にて御申越可被下候、

七翫 外兄両拜

池ノ端先雅（印章）「何夢伝盲章」
とあり、玉宝堂金兵衛を通じて横山松三郎へ、芝に在るギルベッドへいつ頃会いに行くのかなどと、その都合を尋ねている。

玉宝堂金兵衛は、東京下谷で金銀製杯などを製造、販売していた宮内省御用達の店の主人と思われる。



著者所蔵絵葉書より部分拡大



玉宝堂絵葉書（著者所蔵）

「芝増上寺大門通り源興院内新聞局同居英国人義耳弁的（ルビ：ギルベット）」という写真師については詳細がよく判らないのだが、「芝増上寺大門通り源興院内新聞局」というのは、ジョン・レディ・ブラック(John Reddie Black, 1827~1880)が、明治5年(1872)3月に外国人社主兼編集長として創刊した日本語の新聞『日新真事誌』という新聞社のことである。ブラックは最初、築地居留地で創刊したが、四月に芝山内源興院に移転して、家族ともどもここで住んでいた。（註：源興院は誤字で、源興院のこと）

余談ながら、このブラックはその後、横浜に戻り、明治13年(1880)6月11日に亡くなり、未亡人と3人の子供を残した。彼の息子、ヘンリー・ジェームズ・ブラック(Henry James Black, 1858~1923)は、日本では快樂亭ブラック(Kairakutei Black)という名前で有名になった。彼は、日本で唯一の外国生まれの落語家であった。

「同居英国人義耳弁的」という写真師は、ブラックと親しい人物であることが推察できる。

ブラックは、文久元年(1861)頃にオーストラリアから来日し、慶応3年(1867)には自ら、毎夕発行の横浜最初の日刊新聞『ジャパン・ガゼット』を創刊した。『ジャパン・ガゼット』は、大正12年(1923)の関東大震災まで、夕刊紙として存続するが、創刊から数年後の明治3年(1870)には、ブラックはジャパン・ガゼット社を退社して、今度は『ファー・イースト』の刊行に乗り出した。

創刊以降3巻まで、『ファー・イースト』に写真を提供したのは、オーストリア人の写真家、ミヒャエル・モーザー(Michael Moser, 1853~1912年)であった。

しかし、明治6年(1873)、モーザーが瀧日したため、同質の写真の入手が難しくなったのか、『ファー・イースト』の紙面構成は、4巻以降大きく変わる。隔週の刊行が月刊となり、本文中に貼り込まれていた写真が、片面だけに写真を貼った台紙を記事の間に挿入するようになる。そのため、現存する4巻以降の『ファー・イースト』においては、写真の挿入されている位置が一定ではなく、抜けている場合もある。前出の『The Far East』復刻版に収録されている巻末附録、金井園(かない まどか)編『ザ・ファー・イースト』貼付写真総目録及び解説に示されたページに、必ずしも同じ写真の貼られた台紙が挟まれているわけではない。（以上、『開港のひろば』第99号(2008(平成20)年1月30日発行)掲載、新収資料紹介「ファー・イースト」1巻による）

また、このミヒャエル・モーザーは、明治6年(1873)まで芝のブラックの元で暮らしていたことは、宮田奈奈、ペーター・パンツァー編『少年写真家が見た明治日本—ミヒャエル・モーザー日本滞在記』(勉誠出版、2018年)にあるミヒャエル・モーザーの日記で判っている。

また、ミヒャエル・モーザーは、ウィーン万国博覧会に向かう日本の事務局員に通訳として同行することを希望していた。

このため、当初、「同居英国人義耳弁的」という写真師は、このミヒャエル・モーザーではないだろうか？と僕は考えていた。



ミヒャエル・モーザー肖像写真

ところが、ミヒャエル・モーザーの日記を詳細に調べてみると、安政4年(1875)からヴェネツィアで写真家として働いていたカルロ・ナヤから写真を学んでいたグリエルモ・バルシェーという人物がいることが判った。しかもこの人はミヒャエル・モーザーの日記では「バルヘット」として記述されていたのだ。（ミヒャエル・モーザーもナヤから月光写真を学んでいた）
(森重和雄)